

ジロンドンとモンタニャールの対立

——日・仏の研究史によせて——

河 野 健 二

I

フランス革命は1789年に始まった革命であるから、そのときからやがて200年になろうとしている。フランスでは200年を記念して、さまざまな行事を予定しているようであり、その一つに世界的な規模でフランス革命の研究者の連絡組織をつくり、各国や各地域ごとの研究活動を活潑にして、その成果を国際的なシンポジウムに結集する計画がある。その呼びかけは私のところにも届いている。

フランス革命について書かれた書物は、革命のさなかから始まって、現在にいたるまで夥しい数にのぼる。フランス革命は流血の革命と呼ばれるが、革命で流された血よりも遙かに多量のインクが、革命について書くために流されたと言われるほどである。

わが国で最初にフランス革命を詳しく紹介した書物は、江戸時代の蘭学者、箕作阮甫の孫にあたる箕作麟祥が明治4年(1872年)に発刊した『万国新史』(上・下)である⁽¹⁾。すべての国の最新の歴史と題しながら、この書物はフランス革命の勃発からナポレオンの皇帝就任までを扱い、簡潔な漢文調の名文である。英仏の概説書を参考にして書かれたこの書物の立場は、ロベスピエールなどのモンタニャールすなわち「山嶽党」の行状を激しく非難する立場であり、かれらを「激烈暴戻ノ徒」として攻撃した。

ところで、箕作麟祥が東京に開いた「仏学塾」に学んだ一人に中江兆民がいた。フランス留学から帰国した兆民は、国会開設や自由民権の運動に

かかわる一方、1886年（明治19年）に『革命前法朗西二世紀事』を出版した。この書物もフランスの概説書を参照して書かれたものであるが、書名にある二世紀事とは革命前のルイ15世とルイ16世の二代の治世を扱うという意味である。したがって厳密にはフランス革命を扱ったものでないが、フランス革命の原因、啓蒙思想の存在、王権の政策、世論の動向などを述べるとともに、ミラボー、ロベスピエール、ダントンなどの人物伝も挿入され、興味ぶかい革命前史となっている。

ルソーの訳者であり、民権運動にかかわった兆民の革命論は、革命の激烈さや行きすぎをとがめるのではなく、反対に革命の必然性を明らかにすることを眼目とした。したがって、彼の意図は革命の惨劇を語ることよりも、革命をもたらした政治的、思想的背景を重視することにあったのに違いない。彼はロベスピエールのテロリズムを論じて「殆ンド専制ノ君主ト異ナルコト無キニ至ル」としながらも、その人物については「高ク自ラ標榜シ衆人ヲ凌駕シテ之ヲ制御スルノ概有り」と述べ、悪罵を放つことをしていない⁽²⁾。

この兆民の書物が出た翌年、フランスではオラル（Alphonse Aulard, 1849-1928）がパリ大学の革命史講座の担任者になった⁽³⁾。その時期のフランスではテーヌの『現代フランスの起源』に代表されるようなフランス革命批判が行き渡っていたが、成立したばかりの第三共和政は、一つはフランス革命の共和主義の伝統を守るために、いま一つはフランス革命100年記念を間近に控えて、革命復興にのりだしたのである。

オラルの革命史は『フランス革命政治史』（1901）と題されたように、革命の政治的側面に注目するものであった。彼は革命当時の公式文書を詳しく調べ上げて、民主主義と人民主権の原理がいかにして確立され、またいかにして歪曲されたかを明らかにした。そのさいの彼の政治的立場は、フランス革命が最も急進的となった時期、言いかえると1792年8月10日から1795年10月までの恐怖政治、すなわちモンタニャール支配の時期を

逸脱あるいは変則の時期としてとらえるものであった。いわば、オラールは自分の生きた「第三共和政」下の議会制民主主義を判断の基準としてフランス革命を論じたのである。

ところで、「日本人による最初の本格的な革命史」(柴田三千雄)を仕上げたのは、さきの箕作麟祥の従弟で東大教授となった箕作元八であった。彼の書いた『フランス大革命史』は1919年という「大正デモクラシー」の空気のなかで、その物語り風の叙述と相いまって、多くの人びとに愛読された。その箕作元八が1900年、二度の留学でパリに行き、親しく教えを受けたのが、前述のオラールであった。オラールは19世紀の共和主義の源流をフランス革命のなかに求めて、それを全体として正当化したが、東洋の君主国から留学した箕作元八は、フランス革命を全体として肯定するものの、それは止むをえなかった「大手術」であって、他国が真似るべきものではないという立場をとった。フランス革命はもっと温和な革命運動であれば更によかったというのが、彼の受取り方であった⁽⁴⁾。

すでに述べたように、オラールの革命史は政治的な革命史であった。しかし、19世紀も末年になってくると、単に政治史の変遷を論ずるだけでは飽きたらず、革命の背後には社会経済的な条件、すなわち土地制度や食糧問題、物価変動などが作用しているのではないかという問題関心がつよまった。こうした見方にもとづく研究は、オラールの友人であって社会主義者のジャン・ジョレス (Jean Jaurès, 1859-1914) によってすでに着手されていたが、オラールの後継者で、のちに彼の論敵となるアルベール・マチエ (Albert Mathiez, 1874-1932) によってさらに精力的におし進められた。

オラールとマチエの対立や論戦とはいかなるものであったのか。オラールはフランス革命を民主制と共和制の確立として理解するが、その見方からすれば革命中の「恐怖政治」すなわちジロンダンが追放されてモンタニャールのひきいる「公安委員会」の独裁が始まり、ついでテルミドールで

それが打倒されるまでの時期は、立法と行政とが分離しない変則的な時期だということになる。いうまでもなく、この時期は国王の幽閉や処刑、戦争の危機的状況などが起った革命の絶頂期であり、この時期を含む点にこそフランス革命の特徴が最もよく見られるとされているものである。オラールは、すでに述べたように、ロベスピエール派の「革命政治」をまったく偶発的な緊急措置であり、非常事態に直面して生じた逸脱でしかないと見た。こういう見方にたいして強硬な批判を提出したのがマチエであった。マチエはジャン・ジョレスの影響もあり、また第一次世界大戦およびロシア革命という激動の時代を生きた人間としての体験から、恐怖政治や革命的独裁を単に一時的で変則的な事態として片づけるのではなく、それを必然的で不可避的な階級闘争の現われとして理解すべきことを説いた。

それはどのような階級闘争であろうか。マチエは1789年以後、革命を推進するブルジョワジーがさまざまに分裂し、相互に対立と抗争をくり返すことを認める。革命中の党派であるフイヤン、ジロンダン、モンタニャールがつぎつぎに権力を握るが、それらはいずれもブルジョワジーの代表であるとはいえ、モンタニャールが最も民衆に近い真実の解放者であった。これに対してジロンダンはブルジョワ的自由に固執するだけで社会性をもたず、だからこそ物価統制や買占め禁止などの社会政策をもったモンタニャールによってのり越えられたのである。オラールが革命のリーダーとしてダントンを理想化したのに対して、マチエはロベスピエールこそ民衆への愛に導かれて反革命派と徹底的に闘ったリーダーであったとする。彼はロベスピエールと、ロシア革命のリーダー、レーニンとの類似性を説くまでに到っており、両者に深い敬意を払った。

II

ジャン・ジョレスの社会経済史的な研究関心をひき継いだマチエは、1907年に「ロベスピエール研究協会」を創設した。それは、ダントンあ

るいはジロンダンではなく、ロベスピエールやモンタニャール、さらにその前身であるジャコバンを顕彰することを通じて、フランス革命を見直すべきだという考え方にもとづくものであった。

マチエによれば、フランス革命は単一の革命ではなく、そのなかには数個の革命が含まれている。すなわち、第一の革命としての「貴族革命」(1787-89)、第二の革命としてのブルジョワ革命(1789-92)、第三の革命であるジロンダンの革命(1792-93)、第四の革命であるモンタニャールの革命(1793-94)があいついで起り、テルミドール反動(1794年7月)以後ナポレオンの独裁にいたるまでの反動期がそのあとにつづく。マチエによるこうした時期区分は、それぞれの内容をどう理解するかは別として、革命の客観的な筋道を明らかにしたものとして評価される。「今日のフランス革命史研究の出発点は、マチエにあるといってよい」(前川貞次郎)とされる所以である⁽⁵⁾。

ジャン・ジョレス、マチエの問題意識と研究動向をひきついで、フランス革命における農業・農民問題に関心を集中し、「農民革命」としてのフランス革命という観点を示したのがジョルジュ・ルフェーブル(Georges Lefebvre 1874-1959)である。ルフェーブルはジョレスやマチエほど社会主義的あるいはマルクス主義的であったとは見られないが、ジャコバンのラディカリズムの継承者であり、ブルジョワでもプロレタリアでもない自立的な農民層のあり方について深い関心をよせた。彼の学位論文は『フランス革命下のノール県の農民』であり、18世紀末の北フランスの農村における土地所有や経営形態に関する詳細な実証研究によって、革命の基盤というか奥深い土壌を解明したものである。

ルフェーブルによれば、フランス革命は単に時期区分の対象であるばかりでなく、1789年という一年間だけを取ってみても、そこには担い手や要求内容や行動様式を異にするさまざまな階層の革命が含まれている。したがって、マチエが説くよりもっと深刻な意味でフランス革命は「複合

革命」であり、「貴族の革命」「ブルジョワの革命」「民衆の革命」「農民の革命」という性質を異にする自立的な四つの革命が全体としてのフランス革命を形成するという構図になる⁽⁶⁾。

彼が重要視した「農民革命」についていえば、フランスの農民は革命前においてすでに農奴身分でなく、大部分が自由な土地所有者として農地の過半から四分の三程度を所有していたが、一戸当りの面積では過小農が大多数を占めていた。フランス革命はこれらの農民の上に蔽いかぶさっていた教会十分の一税や領主特権、封建貢租などを取り去り、また国有財産の売却によって農民の所有地に若干の追加分をあたえたが、他方、農民は貴族や都市民の報復や襲撃をおそれて恐慌状態におち入り（「大恐怖」と呼ばれる）、またブルジョワによる国有財産の買占めや、農村共同体の解体という経済攻勢に直面して、結局、革命前と大差のない小農民と零細農民が伝統的生産方法を維持したままで革命から抜け出ることとなる。

「農民革命」を以上のように位置づけたルフェーブルは、全体としてのフランス革命をどう見たであろうか。彼の『89年』（邦訳は『1789年—フランス革命序論』）は、フランス革命150年記念にさいし、第二次世界大戦を目の前にして書かれた記念すべき著作であるが、そこで彼がフランス革命の核心として強調しているものは、1789年の「人間と市民の権利宣言」である。もちろん、この宣言はブルジョワ議会の産物であったけれども、しかしロベスピエールなどのジャコバンや行動する民衆の力がこの宣言を確実なものとし、実効あるものとしたと主張する。

ルフェーブルのフランス革命観は、「複合革命」の主張にもかかわらず、結局はブルジョワ主導のブルジョワ革命であったということに帰着する。ところが、この「ブルジョワ革命」という概念をどう理解するかという点については問題がある。ブルジョワあるいはブルジョワジーという言葉は発生史的にはブルグである都市に住む人間を指しており、商人や法律家などの集合体がしだいに特権や自治権を獲得していったその結果、農民や農

村からはみ出した浮浪者などとは別個の存在としてブルジョワという呼び名が定着した。フランス革命の時点でいえば、この階層は「第三身分」の中核をなし、王族や貴族、聖職者などの特権身分ではない平民層を指していた。したがって、農民であろうと、職人であろうと第三身分には違いなかったが、その第三身分のなかで自由職業や経済活動に従事して、多少とも資産を備え、議員になったり、一般民衆を指導したりする階層、言い換えると平民の土地所有者である地主をも含む上層市民の階層がブルジョワジーと呼ばれることになる。

しかし、このブルジョワという言葉が革命と結びつけられて「ブルジョワ革命」という概念に仕立て上げられると、それは本来的にはマルクス主義の用語となる。マルクス主義の立場では、世界史はブルジョワ革命とプロレタリア革命との二つを経験することで進歩するものであり、前者は封建社会を資本主義社会に向って転換させ、後者は資本主義社会を社会主義社会に向って転換させるものと規定される⁽⁷⁾。ブルジョワ革命は1648年のイギリス革命や1789年のフランス革命などによって代表される。マルクス、エンゲルスは周知のように1840年代から精力的な理論的、実践的活動を始めたが、その当時かれらが最も関心を寄せたのはドイツの三月革命（1848年）の成りゆきであった。イギリス、フランスに比らべてのドイツの後進性を指摘するかれらは、ドイツのブルジョワ革命がどこまで徹底して闘われるかについて深刻に憂慮した。そういう見方から、かれらは17世紀のイギリス革命、18世紀末のフランス革命を「典型的」または「古典的」ブルジョワ革命として位置づけ、とくに1789年のフランス革命の徹底性を高く評価した。エンゲルスは言った。「フランスは階級闘争が最も徹底的にたたかわれた国である。」⁽⁸⁾

マルクスはもっと具体的にフランス革命を評価する。「1789年のブルジョワジーは、かれらの同盟者である農民たちを一瞬たりとも見捨てなかった。かれらは自分たちの基礎が農村における封建制の破壊であり、土地を

所有する自由な農民階級をつくりだすことである、ということを知っていた。」⁽⁹⁾ この文章を読むと、ルフェーブルが注目した農民革命こそ「典型的ブルジョワ革命」としてのフランス革命の核心であるという印象を禁じえなくなる。もっとも、ルフェーブル自身は土地所有農民を「つくりだした」とは見えていないことを忘れてはならない。

III

こうした問題をどう考えるべきか。これがルフェーブル以後の研究者に托された課題であった。第二次世界大戦以後のフランス革命研究では、マルクス主義の影響力は一段と強まった。ルフェーブルの後継者でパリ大学の革命史講座を担当したアルベール・ソブール (Albert Soboul, 1914-82) と、その相弟子で東京大学教授となった高橋幸八郎 (1912-82) の二人は、いずれもルフェーブルの業績をひきつぎながら、マルクス主義の文脈のなかにフランス革命を位置づけることを試みた。

ソブールと高橋のフランス革命観をあらかじめ要約しておくと、ソブールは階級闘争に力点をおく立場から、革命におけるブルジョワジーの妥協性や不徹底性を指摘し、パリの民衆や農民の能動性あるいは革命性を強調する。⁽¹⁰⁾ こういう観点から晩年のソブールは、平等主義者のバブーフこそ、最もよくプロレタリア革命への接近を示した人物であったという評価をあたえて称揚した。これにたいして高橋の関心はもっと経済史的であり、『封建制から資本主義へ移行の諸問題』(1982) が彼のフランス語による著書のタイトルであるように、封建制から資本主義への移行のなかにフランス革命を位置づけることを自己の課題とした。マルクスとの関連でいえば、『資本論』や『資本制生産に先行する諸形態』などの論理に密着して革命を理解しようとしたのである。そのさい、高橋の問題意識のなかには、フランス革命と対比されるものとしての日本の近代化、すなわち明治維新の後進性や不徹底性への思いがあり、あたかもマルクスやエンゲルス

がドイツ革命を論じたときと同じような気持がこめられていたことは想像にかたくない。

『共和国2年のサン・キュロット』と題する学位論文をもつソブールは、ルフェーブルとは違ってパリのサン・キュロットと呼ばれた民衆的な革命家たちに関心をよせ、かれらの生活状態や行動、思想について詳細な分析を試みた。⁽¹¹⁾ 階級闘争説の継承者であるソブールは、フランス革命が貴族あるいはアリストクラートにたいするブルジョワジーの闘争であることを認め、フランス革命の一体性および一貫性を主張する点でルフェーブルと違っているけれども、にもかかわらずサン・キュロットの下からの強力な突き上げがなければ、優勢なアリストクラートにたいして妥協的で臆病なブルジョワジーが革命に勝利することはなかったと説く点で、ルフェーブルの「農民」の代わりに「民衆」をもってきたという印象を受ける。

ソブールのフランス革命観は、つぎの文章のなかに読みとることができる。

「フランス革命は、さまざまなブルジョワ革命のなかで最も光彩をはなつものであり、先行する諸革命をはるかにしのぐドラマティックな階級闘争の性格を備えていたが、フランス革命がそのような特質をもったことの原因は、いかなる譲歩をも拒否して封建的諸特権にしがみついていたアリストクラート層の執念と、それにたいしてあくまでも戦った人民大衆の反抗の激烈さにある。」⁽¹²⁾

この文章が示すように、ソブールの強調点は、貴族層と人民大衆との間の階級闘争にあり、妥協的なブルジョワジーは人民大衆と同盟することでやっと封建制の破壊にたどりついたという構図がえがかれる。ソブールがのちになって、人民大衆のなかから生れた最も大胆な理論家で実践家であるバブーフに傾倒する道すじも、すでにここで読みとることができる。前にも述べたように、ソブールは革命のブルジョワ革命としての性質を認めるけれども、ブルジョワジーの力や主体性についてはマルクスがあ

たえたほどの高い評価をあたえていないと見てよい。

この点について対照的な見方を示したのが高橋である。ソブールはサン・キュロットあるいは人民大衆のエネルギーを重視し、それに同調した政治勢力としてジャコバンを理解し、その経済的基盤を中小ブルジョワジーと考えているが、高橋はその中小ブルジョワジーこそ本来的な資本主義の担い手であり、それらの中小生産者層が市民革命で封建制あるいは封建的土地所有を全面的に廃棄することなしには、「近代資本主義」も、したがって「近代民主主義」も生まれないという見解を示した。⁽¹³⁾

この高橋の見解は、イギリス経済史の上で、地主であるジェントリーではなく、ヨーマンリと呼ばれる独立自営農民あるいは「中産的生産者層」の成長のなかに資本主義の本来の地盤を見た大塚久雄の業績と歩調をひとしくするものであり、それは第二次世界大戦後の日本の社会学者たちの間で大いに賞賛された見解である。しかし、モンタニャールあるいはジャコバンが革命闘争において急進的であり、それによってアンシェン・レジーム、あるいは絶対王政の諸規制、領主特権や封建的負担を廃止する上で貢献したことは認められるとしても、ジャコバン＝モンタニャールこそ資本主義を推進する産業資本家あるいはその前身であると説くことには無理があると言わざるをえない。

個人的なエピソードを記すとすれば、戦後10年ほど経った時期に、高橋のあっせんによってソブールが来日して、シンポジウムや講演会が開かれた。高橋とソブールは京都を訪れ、ソブールは立命館大学でフランス革命研究について講演した。マチエルやルフェーブルについて話したあと、彼は高橋の見解にふれ、論争好きのフランス人らしい卒直さで次のような批判を述べた。つまり、ジャコバン＝モンタニャールは資本主義の推進者だと高橋はいうが、かれらのうちに資本家が一人でもいただろうか。証拠があれば示してもらいたい。こういう趣旨であった。その夜の会合で高橋は大いに不機嫌であったことを私は覚えている。

すでに述べたように、ゾブールはむしろフランス革命の反資本主義的な性格を強調したいのに対して、高橋はそれこそが本来の資本主義の性格に他ならず、ドイツや日本の資本主義は封建的性格をまとった「本来的」でも「典型的」でもない資本主義だという受取り方を示した。すでにマルクスが疑問の余地なく示したように、資本主義は搾取関係、具体的には賃労働関係を内包するものであり、そういう抑圧的・強制的関係を理論的には内包しない自営農民や単なる商品生産者を産業資本家の前身としてのみ取扱うわけにはいかない。資本家になるか、プロレタリアになるか、あるいはいずれにもならないか、それは一義的に決定しうることではなかった。

こういう批判にたいして、もちろん反論はありうる。すなわち、封建制の革命的な廃棄なくして、どうして資本主義の本格的な展開がありうるのか。フランス革命を推進したブルジョワ層は、ブルジョワ的利害以外の何を目指したのであるか、などが予想される。

多くの論点に関連してくることは避けられないが、高橋説の前提にある確固たる視点は、「封建制から資本主義への移行」がフランス革命によって決定的な解決をあたえられたということ、さらにその解決はジロンダンとモンタニャールの闘争によってもたらされたということにある。封建制はその結果として一掃され、資本主義が本格的に展開することとなる。こうして高橋はフランス革命を1792年—93年を画期として二分し、前半では「領主的な利害関係において土地改革・農民解放を行なってゆこうとする体系」すなわち「封建地代の合法性を承認せしめ、その形態の近代化、貨幣転換を行なうことによって封建的諸権利を近代社会への構成的契機としてもちこもうとする仕方」が優越し、後半になって始めて「直接生産者＝農民の方式、すなわち農民革命は、封建地代の無償廃棄の運動組織であり、封建的なものを近代社会成立の過程から排除してゆく体系」が展開する。これが1950年ごろの高橋の論理であった。⁽¹⁴⁾

問題はジロンダンの支配した政権が封建地代を合法化し、モンタニャー

ルの政権が封建地代の無償廃棄をしたものと解釈することが果して正当であるかどうかである。簡単な史実を挙げよう。ルフェーブルは革命前の土地所有状況をかなり詳細に調査しているが、その結果を要約すれば全国平均で貴族・教会領が31.7%、市民の所有地22.6%、農民所有地37.6%ということになる。ここから推論されることは、固有の封建的土地所有は教会領（8.3%）を含めても3割強であり、いわゆる封建地代は全国の農地の3割にしか賦課されていない。その他の農地は、その過半がかったの隷属民たる農民によって買取られたものであって、農民たちの粒々辛苦の結果である。さらに、残りの土地は農民の窮迫に乗じて、市民たる商人や金貸しが買取り、それを小作に出しているわけである。したがって、地域差はあるとしても、全土の約7割がすでに事実上、封建的負担から解放されるという過程が革命前に進行しているのである。もちろん、個々の農民が零細であるという問題があり、教会領や亡命貴族領の国有化とその売渡しという政策がとられたけれども、それは封建制とは別個の所有地面積にかかわることがらである。したがって、主として貴族の所有地で存続する封建的負担をどのように処理するかがフランス革命の性格を決する問題であったとは見られない。ただし、貴族身分やそれにまつわる特権をどう扱うかは、国家構造あるいは憲法体制の問題であり、それが革命の帰趨にかかわったことはいうまでもない。

封建制廃止の問題は、たしかにフランス革命の中心課題の一つではあったが、その処理と解消のプロセスは1789年8月4日の決議があって以後、着実に前進したのであって、ジロンダンが封建制を残し、モンタニャールがそれを廃止したという具合に受取るべきものではない。高橋は彼の遺著となった『近代化の比較史的研究』（1982年）において、ジャン・ジョレスを引用しながら、フランス革命では「狭く寡頭制的なブルジュア革命」の体系と、「広く民主的なブルジュワ革命」の体系が対抗したが、後者が勝利して近代資本主義への展望が開かれたとしている。⁽¹⁵⁾ この場合には、

ジロダンの支配はともかく「ブルジュア革命」の体系だと認められ、封建制の継承者とされる不名誉からはまぬかれているようである。ただし、革命による農民解放が資本主義のための必須要件だとする彼の議論には変化が見られない。

IV

高橋とは別個にわれわれもまた、フランス革命の研究に着手した。京都大学の人文科学研究所では桑原武夫を代表者とする共同研究のグループを組織し、ジャン＝ジャック・ルソーやフランス百科全書を研究したのち、フランス革命を研究対象として取り上げた。われわれの関心は主として思想や人物論にあったが、しかし高橋が注目した経済史やマルクス主義に関わる論点も逸するわけにはゆかなかった。

われわれの研究成果は、桑原武夫編『フランス革命の研究』と題する700ページの大著として1959年に出版された。⁽¹⁶⁾ フランス革命にたいするわれわれの見方は、全体としていえば、この革命を何よりも政治的・思想的達成として受取ることであり、封建制と資本主義がこの革命を画期として交替するとか、まして交替を可能とする対決がジロンドンとモンタニャールの対立であったとは見ていない。

われわれはフランス革命がブルジョワ革命であることを認める。しかし、その意味は絶対君主や特権身分が支配的である国家構造が、第三身分あるいは広い意味での「市民」としてのブルジョワを主体とする国家構造に切り変わったということであり、それに尽きる。およそ革命の基本的な任務は、国家構造あるいはもっと具体的には政治権力をめぐる階層関係に急激な質的变化をあたえることであるが、そうした基準からすると、フランス革命が近代における代表的な革命であることはもちろんであり、その点に疑問の余地はない。

しかし、フランス革命はマルクスが述べるような意味での階級闘争であ

るかどうかという点になると、多くの留保条件が必要だと私は考える。⁽¹⁷⁾
まず、封建制と封建勢力の問題であるが、生産様式としての封建制は革命の数世紀前から解体を始めており、農奴解放、領主直営地の消滅、地代形態の変遷、さらにその上に前述したようなブルジョワ地主的、自営農民的土地所有の形成などを考慮すれば、封建的關係が地域的変差をもちながら変質と解体の歩みをつづけていたことは明らかである。ただ、残る問題は特権身分が国家構造の一環として存在し、かれらの権利や慣行が権力によって保証され、そのため地主や農民の土地所有が法的、権力的な保証を受け取っていない点にあった。だからこそ、市民や農民は権力闘争を通じて、それを獲得し確保する必要があったのである。したがって、フランス革命で存在したものは、王権、貴族、教会などにたいする議会、農民と市民の集団、食糧難などを理由とする民衆暴動などの権力闘争であり、封建的権利の問題も当然に含まれるけれども、闘争のレベルはもっと高度であって国家構造そのものの再編成が志向されていたのである。

高橋が関心をよせたいま一つの論点である資本主義の問題はどうか。これについては高橋みずからが認めているように、フランス革命の時点で具体的に存在する生産様式は自営農民や小ブルジョワ的な商品生産であって、本来の資本家的生産様式ではない。ただ、彼は農民や小生産者の成立が本来の資本主義の基礎だという点を強調するのだが、前述したように、この主張は説得的でない。したがって、農民や小ブルジョワの闘争をブルジョワジーの闘争として読み替えるわけにはゆかない。生産様式としての資本主義を代表し組織する階級は、まだ萌芽的にしか形成されておらず、したがってそうした階級による闘争が勝利したとは認められない。

では、ジロンダンとモンタニャールの対立についてのわれわれの見解はどうか。前記の『フランス革命の研究』では、両者の違いはブルジョワ的であるか、プチ・ブルジョワ的であるかの違いであり、それは階級対立ではなく、理念と政策を異にする党派の違いであるとしている。前者は私有

財産と経済的自由を主張の中心におき、後者は小生産者大衆の要求により一層忠実であって、自由よりも平等に力点をおき、私有財産の制限や経済統制などの権力の介入を是認する立場をとるとした。しかし、この対立は原理的な対立、妥協不可能な対立であろうか。われわれの書物では、原理的対立と見る論文（序論・フランス革命の構造）と、そう見ない論文（前川貞次郎「ジロンド派とモンターニュ派の対立」）の二つの視点が交錯している。いずれも、マチエの階級闘争論には批判的であるが、前者のようにブルジョワ勢力とは別個のプチ・ブルジョワ勢力をとり出して両者の政治的対立を説こうとすれば、それは原理的対立ということにならざるをえない。

この微妙な点については、いささかの自己批判が必要だと「序論」の執筆者の一人として、私は考える。結論だけを書けば、両派の理念や思想上の相違を重視しないで、当面する政策の上での違いだけを認めたオラルールやジャン・ジョレスの見方が基本的には正しいのではないかと私は思う。オラルールが認めた政策上の相違点は、モンタニャールがパリの優越性を認めたのにたいして、ジロンドンはそれを認めなかったということに尽きるが、実はそこに同じデモクラシーの国家を構想する場合の違いが反映されているのであって、この指摘はきわめて重要である。長期的に見れば近代国家で定着したデモクラシーはジロンドンの目指したものと同じであり、これに比べると、モンタニャールの立場は危機的な状況への対応としてのみは認められるものではなかったかと思われる。これにたいして、ジャン・ジョレスは両者の対立を党派心の対立と見ており、一方はブルジョワジーの利益に奉仕し、他方は民衆の支持に頼って政策論をたたかわせたが、その対立の根底にあるものは野心と権力欲の争いでしかないという突き放した見方をしており、両者ともにブルジョワ的指導者である点に変わりがないとする。⁽¹⁸⁾

最後に、以上の見方を前提として私の考えを手短かに述べておこう。

土地改革や食糧不足などの経済問題を含むとはいえ、ブルジョワ革命は基本的には政治的・イデオロギー的変革であり、ある種の定式化された目標である「自由」「平等」「友愛」、あるいは「人権」や「デモクラシー」などを共通の合言葉として、それらの目標に合う国家形成を行なうことを課題としている。フランス革命はそうした変革の代表的なものであった。

権力闘争を基本とするとはいえ、フランス革命に先き立って旧権力たる絶対王政の解体過程がすでに深刻に開始されていたことと、何びとも来るべき国家構造がどのようなものとして定着するかについて確信をもたなかったという状況がある。とはいえ形成されるべき国家が政治的自由や人権の尊重を中核とすることを願う集団または階層と、そうではなく新たな国家は社会的平等を維持するために全力をつくすべきだと希望する集団または階層が発生し、両者が次第に対立の度合いを深める。前者は有力ではあるが少数者の声であり、後者は無力とはいえ多数者の声を代表した。

フランス革命の特色は、前者を表現するジロンダンが終始優勢を占めることなく、後者を代表するモンタニャールによって追いこされ、敗れたことである。この革命が民衆的・民主主義的革命といわれる所以である。しかし、モンタニャールの勝利の背景には、対外戦争の危機・民衆の武装と蜂起という軍事問題が深刻に存在していたことを忘れてはならない。革命を推進する民衆が同時に軍事力の主体となったことが「モンタニャール独裁」を可能にし、それによって国家構造への「下から」の参加が実現した。ジロンダンが望んでいたような権力からの自立ではなく、いわば権力への没入による国家形成、あるいは市民が同時に愛国者であるという構造が目指されたのである。それがのちにジャコバン主義と呼ばれることになった思想潮流である。こうして、フランス革命は同時にナショナリズムの偉大な昂揚期であったことを忘れてはならない。⁽¹⁹⁾

しかし、「モンタニャール独裁」はことがらの性質上、永続性をもたなかった。戦局の好転と物資の出廻りが「美德の共和国」を解体させる力と

して作用し始めることが避けられなかったからである。ブルジョワ的自由主義が復活し、フランス革命後期の未熟で動揺常なき国家形態、一種の試行錯誤の時代にひきつがれることとなった。

国家構造の転換は、もちろん真空のなかで行われるものではない。それは社会経済状況の具体性のさなかで進行し、また定着する。そこで経済史の上でフランス革命をどう位置づけるかという問題は避けることができない。ここでもまた結論を書くにとどまるが、一般論として16世紀以後のフランス経済ではブローデルのいう意味での「市場経済」が成立していると見るべきであり、⁽²⁰⁾ 封建経済を特徴づける自給的な現物経済は、荘園や村落共同体あるいは都市の手工業の内部などに局限されるものの、それらもまた貨幣流通や貸借関係によって浸透されつつあり、それこそが統一的な権力を生み出し、育て上げる基盤であった。周知のように18世紀になると事態は一層進展し、市場経済を前提として特権商人、独占機構、売官制、徴税請負などの利権のヒエラルキーが国家にまといつくこととなる。この政治的・経済的メカニズムの解体は、まず重農主義者や自由貿易論者によって着手され、ジロンダンがそれを継承したのである。

しかし、ジロンダンの自由主義は政治の分野におけるのと同様、長期的にはともかく、既得権や目先の利害が渦まく状況のなかでは有効なものではなかった。諸利権や不当利得の源泉には思い切った切開手術を加える必要があった。それをなしとげたのがモンタニャールの強力であった。この「フランス革命の巨大な簞」(マルクス)によって、私有財産への拘束が解かれ、自由な経済競争が展開される場が設定されたのである。ただし、ブルジョワ国家という大邸宅では掃除をする人間がそのまま邸宅の主人公として居すわるわけにはゆかなかった。⁽²¹⁾ それがモンタニャールの悲劇であった。

では、モンタニャール独裁は資本主義を促進したといえるだろうか。これらの理想や政策目標がそうでなかったことは明らかである。モンタニャ

ールが目指したのは市場経済の論理が貫徹することにブレーキをかけることであり、かれらはそうすれば平等社会が維持できると考えた。市場経済の展開のなかから資本関係が広く形成されてくるのは、革命後少くとも2、30年のちのことであり、その点でモンタニャールはよくも悪しくも、資本主義の展開に関わりをもつものではなかったと考えられる。

こう考えると、フランス革命は近世の初頭いらい継続的に追求されてきた政治的变化、それによる国家構造の整備が最後の仕上げ過程に入り、そこで現われた巨大な政治的激動であり、それを経過することによって始めて近代国家が確定した歴史的事件であったと考えられる。それはまさに、近代と呼ばれるにふさわしい政治的・思想的画期を開いたものであり自由と平等を二大原理とする近代国家のあり方を確定した。自由とともに平等もまたブルジョワ国家の特性となったのである。経済史的に見れば、この革命の土台の上でいわゆる資本の原始的蓄積と技術革新が進行して、やがて資本主義の生産様式が本格化するのである。この意味で、国家構造の転換こそがフランス革命の中心課題であったと見なければならぬ。

したがって、私の考えによれば、フランス革命とともに、政治が優位を占める時代はおわって、基本的にはイギリスが先例を示している経済の時代、つまり産業革命の時代に移行するのである。フランス革命は絶対王政とともに始まった一つの時代の終幕を告げるものであり、安定した時代がすぐさま訪れたわけではなく、事実、ナポレオン戦争という革命戦争につづく侵略戦争の時代を通過しなければならなかった。新しい時代がそのあとになって訪れ、産業と貿易の利害に服従する散文的な時代として開始されることは周知のとおりである。

注

(1) 箕作麟祥『万国新史』上・下、明治4年(1871年)。

(2) 『中江兆民全集』岩波書店、8巻。

- (3) 前川貞次郎『フランス革命史研究』創文社, 1956年, p. 221。本稿はこの研究に多くを負う。
- (4) 井手文子・柴田三千雄編『箕作元八滞欧「簞梅日記」』東京大学出版会, 1984年解説, 参照。
- (5) 前川貞次郎, 前掲書, p. 284。
- (6) G・ルフェーブル『1789年—フランス革命序論』, 高橋・柴田・遅塚訳, 岩波書店, 1975年。
- (7) マルクス・エンゲルス『共産党宣言』(岩波文庫) その他。
- (8) マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』所収のエンゲルス序文。
- (9) マルクス『封建的諸負担廃止法案』。
- (10) ソブール「現代世界史におけるフランス革命」(『1789年—フランス革命序論』, 前掲書, 所収)。なお, ソブール説について, Furet, Fr., *Penser la Révolution française*, Paris, 1978, のきびしい批判がある。
- (11) Soboul, A., *Les sans-culottes parisiens en l'an II*, Paris 1958〔部分訳に井上幸治監訳『フランス革命と民衆』平凡社, 1983がある〕。
- (12) ソブール「現代世界史におけるフランス革命」, 前掲論文, p. 348。
- (13) 高橋幸八郎『近代化の比較史的研究』岩波書店, 1983年。
- (14) 高橋幸八郎『市民革命の構造』お茶の水書房, 1950年。
- (15) 高橋『近代化の比較史的研究』, 前掲書, p. 130。
- (16) 桑原武夫編『フランス革命の研究』岩波書店, 1959年。
- (17) 河野健二『フランス革命とその思想』岩波書店, 1964年, p. 113。
- (18) 前川, 前掲書および桑原編, 前掲書中の前川論文, p. 494。
- (19) 桑原編, 前掲書中の桑原論文, p. 26。
- (20) Braudel, F., *Civilisation matérielle, économie et capitalisme*, Paris, 1979. [邦訳, F. ブロデル『物質文明・経済・資本主義』(1. 2) 村上光彦訳, みすず書房, 1985年)。
- (21) 河野健二『フランス革命小史』岩波書店, 1959年 p. 167。